忙中閑話　『商いの心』を大切に

宗教的倫理観に基づいて、自己を律し、勤勉、正直、節約的に働いた結果としての富の蓄積を認めたことが、近代資本主義の発展の原動力になった」（「プロテスタンイズムの倫理と資本主義の精神」マックス・ウェバー）

「商人の道を知れば、自然と欲の心が消え、『仁の心』をもって商いに勤めるようになり、正しい商いにも叶い、おのずと栄える。故に、商人もまた『仁』を根源とする儒学を学ぶべき」（石田　梅岩）

「大阪商人により、1724年に設立された『懐徳堂』では、利殖の方法を学んだのではなく、経済活動の基盤となる信義を説く倫理道徳を学び、自己の内面を修養して、立派な人間の育成を目ざした」

「渋沢栄一は、『論語とそろばん』を訴え、明治時代の資本主義の中に、儒教精神を取り入れた」

「『商売は菩薩の業、御仏の代行』…近江商人は、深い信仰心を持ち、感謝に溢れている」

経済・経営は「モノの世界」に違いない。しかし、その健全な発展の原動力となっているのは、「精神」であり、「心」である。これは、古今東西、時代を越えて、一つの原則である。

しかし今、「その精神・心」が希薄化し、喪失されている。「精神・心」をどこに求めるべきか？

それは、「商いの心」にある。

勤勉	親切	正直	信用	感謝	謙虚	誠心	誠意	利他
倹約	不奢	愛情	奉仕	貢献	公事	隠徳	知足	小利

を辿れば、「商い」こそ、社会生活の根幹であり、全ての仕事の本質であることが理解できます。

『商いの起源』は、「物物交換」です。故に…『商いの本質』は…

1）価値の交換

2）役に立つこと

3）感謝し合う関係

特に、「役に立つこと」がもっとも大切。つまり、経営・仕事は、「自分が儲ける」ためにあるのではなく、「人々の役に立つこと」が基本であり、その結果として、「適切な利益」が生まれる。

「商人は、貨幣流通と諸物資の交易という仕事を通じて、国や人々の役に立ち、人々が心安くして、暮らせるように働いている」（石田　梅岩）

「物が売れるかどうかは重大な問題です。売れるかどうかと言うと、すぐに儲かるかと言う。物が売れるかどうかは、儲かるかどうかではない。お客さんの役に立つかどうかである。役に立てばうれしいが、役に立たなければ悲しい」（松下幸之助）

「商売は、世の中の人々の役に立つことが目的であり、利益は目的ではない。しかし、利益の伴わない商売は意義がない。これを勘違いして儲けることを目的とするから、うまく行かないのである」（倉本長治）

「役に立つ」という商いの本質は、いわゆる商売の世界だけではなく、あらゆる仕事・職業の本質です。

全ての仕事・職業は、「誰かの、何かの役に立つ」ことが目的です。

「役に立つ」とは、換言すれば、「社会に貢献する」ということです。

それぞれの会社には、経営理念があります。そこに、何が明記されていますか？

おそらく、「わが社は社会に貢献する」と明記されていると思います。

社会に貢献するためには、その仕事に携わる人が、その仕事の本分に徹して、その仕事を通じて、「誰かの、何かの役に立つ」という志を持ち、その仕事の中に、「商いの心」を大切にして、活かして、働くことが必要だと思います。

PROFILE

テクノ経営総合研究所　TECコンサルタント

上田　勝　うえだ　まさる

松下電器出身、営業本部および本社経営監査部等を経て、松下流通研修所、販売研修所　取締役所長を歴任

NPO兵庫経営塾　副理事長